



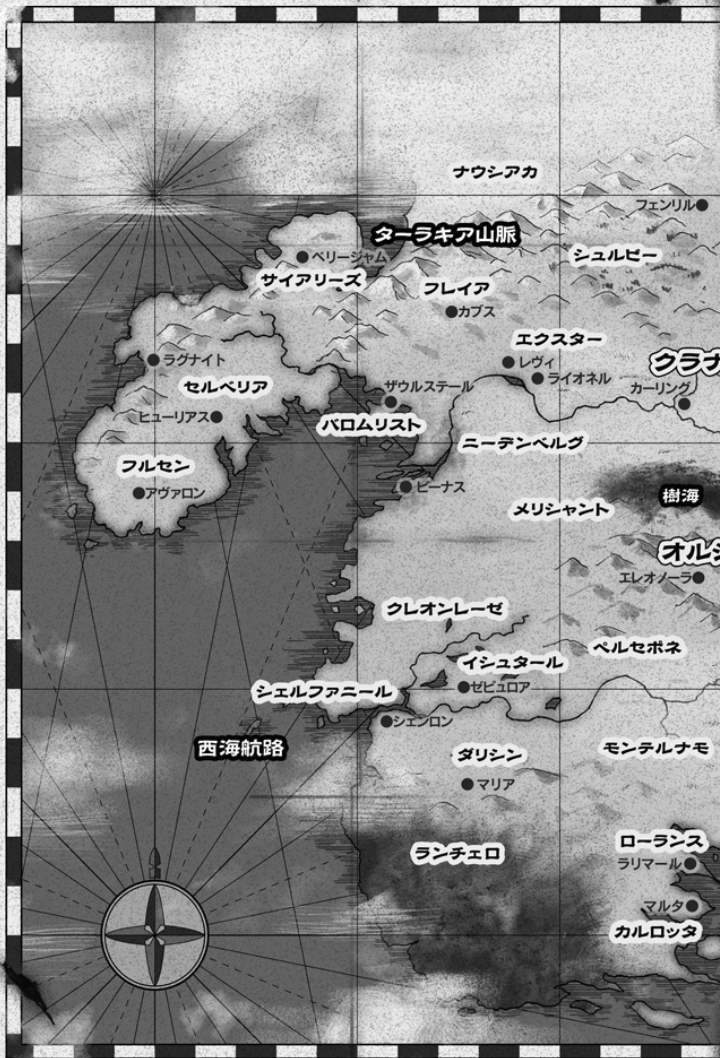
ハーレム *Harem Striker*
ストライカー

立ち読み版

小説 竹内けん 挿絵 瀬奈茅冬*

ハーレムシリーズの世界





ナウシアカ

フェンリル●

タールキア山脈

シュルビー

サイアリーズ

フレイア

●カブス

エクスター

●レヴィ

●ライオネル

クラナ

カーリング●

●ラグナイト

セルベリア

ザウルステール

バロムリスト

ニーテンベルグ

フルセン

●アヴァロン

●ビーナス

メリシャント

樹海

オルシ

エレオメーラ●

クレオンレーゼ

イシュタール

ペルセボネ

シェルファニール

●ゼビュロア

●シェンロン

西海航路

ダリシン

●マリア

モンテルナモ

ランチェロ

ローランス

ラリマール●

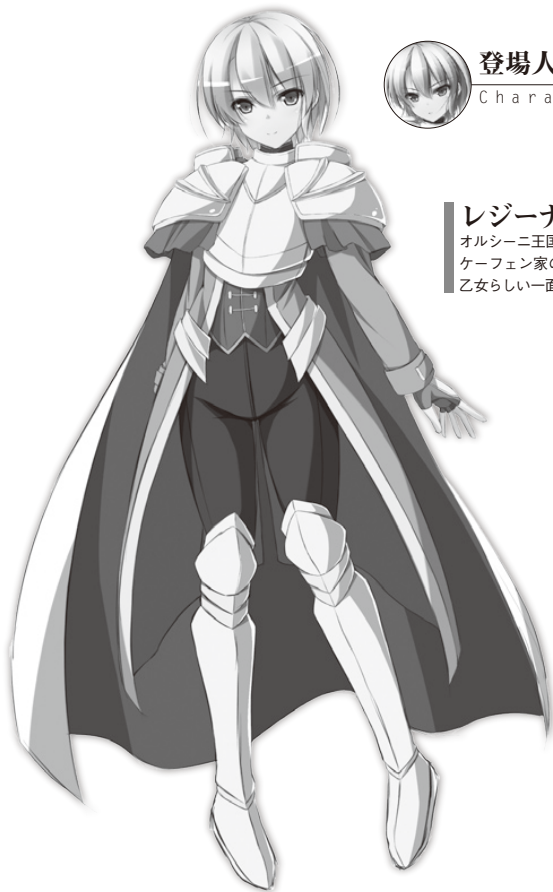
マルタ●

カルロッタ



登場人物紹介

Characters



レジーナ

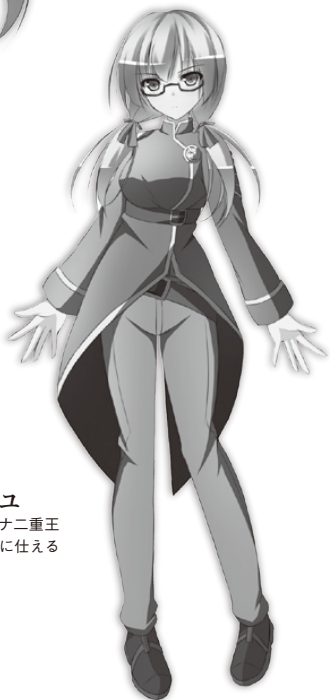
オルシーニ王国の有力な貴族・
ケーフェン家の姫。活発だが
乙女らしい一面もある。

ギンブレット

ケーフェン家に仕える騎士。
聡明で剣の腕も立つ実力者。

ソレイユ

ケーフェン家に仕える魔法
使い。露出度の高い服装で
戦場を暴れ回る。



フロマージュ

オルシーニ・サブリナ二重王
国の国王セリューンに仕える
インテリ風の才女。

第一章	ケーフエン伯爵の秘密
第二章	戦場妻
第三章	昔の女
第四章	痛いお仕置き
第五章	男色疑惑
第六章	旅の終わり

ギンブレッドの胸に顔を埋めたレジーナは幸せそうに溜息をついたが、やがて顔を上げる。

「キスしてくれたら、信じる」

軽く爪先立ちになったレジーナは目を閉じて、小さな顔を差し出してくる。

レジーナは子供のころから活発で男勝りの少女だった。本当の当主であるロージアは大いなる少年であったため、レジーナが嫡男であれば、と多くの人を嘆かせたものだ。

しかし、このたび病気に倒れた弟の影武者として、男装したことで、かえって女らしさを目覚めてしまったようである。

「仕方ないですね」

大人の男として、余裕の笑みを浮かべたギンブレッドは、素っ裸の少女の細い肩を抱き、瑞々しい唇に軽く口づけをした。

チュツ。

これがレジーナのファーストキスだ。

顔を真っ赤にして、はにかむ表情を浮かべたレジーナだが、物足りなそうな声を出す。

「これだけ？」

「はい。続きは帰国してからのお楽しみです。それじゃ満足したら、着替えてください」
どこまでも大人の対応をしてくる年上の婚約者に、レジーナは不満を隠せない。

「うゝ、まだ、時間はあるでしょ。ここるところずっと鎧を着ていたから、身体がギシギ

シいつているの。マッサージして」

ギンブレッドの腕の中から離れたレジーナは、簡易なベッドに飛び乗るとうつ伏せになつた。

小柄な体躯に相応しく小さな尻だが、プリンプリンに張つたさまは、どこかサクランボを連想させる。もつともいくら小さいといつても、サクランボよりははるかに大きい。

「わかりました」

年下の婚約者の奔放さに呆氣に取られたギンブレッドであつたが、苦笑を浮かべて頭を左右に振るつた。

単に甘えたいだけのようにも見えるが、初めての戦場であり、身体に負担がかつたことは確かだろう。

マッサージで揉みほぐしてやるのは悪いことではない。

ギンブレッドはレジーナの細い背中に跨つた。そして、両手に体重を乗せて背中を押してやる。

「あ、気持ちいい♪」

レジーナは気持ちよさそうな声を出す。

確かに筋肉がパンパンに張っている。

（まったく、セリユーンのやつが王になどならなければ、このような無意味な出師すいしを行うこともなかったものを）

こんなあどけない少女を無理やり戦場に連れて来なければならなかった原因を作ったセリューンへの恨みが募った。

肩から肩甲骨、背中、腰、尻まで揉んだあと、左右の二の腕、太腿や脰ふくはぎをマッサージしてやる。

一通り終わつたと見たレジーナは仰向けになった。そして、ギンブレッドの右手を取ると、自らの微乳に添えさせる。

「ここも」

「こちら」

ギンブレッドが笑いながら怒ってみせると、レジーナも悪戯っぽく笑う。

「だって、胸って揉むほど大きくなるんでしょ？ わたしギンブレッドに大きくしてもらいたい」

「はあ、まったく……」

呆れた溜息をついたギンブレッドだが、しゅしゅ両手で微乳を包むとマッサージしてやった。

「ああ、気持ちいい」

掴みどころのないような幼い乳房だが、全体に優しく揉みほぐしていると、桜色の乳首がピクンッと突起してきた。

（あ、やばい。少しやりたくなってきた）

考えてみると、フロマージュと別れて一年。以後、他の女に触れていなかった。

（待て、待て、俺はもう十代のガキじゃないんだ。欲情に流されてどうする。落ちつけ俺）
婚約者といっても、年齢も離れているし、主家のお姫様ということもあって、ギンブレッドは結婚するまで手を出さないと決めている。

このたびの出兵が終わり、帰国すればそのまま結婚式という段取りはすでに決まっていた。

胸を揉む男の顔を見上げた少女は、頬を染めながらおずおずと口を開く。

「ギンブレッド、その……やりたくなかったのなら、いつでもわたしの身体を使用しているんだぞ。その……エッチなことよくわからないけど、わたしはお前の婚約者なんだ。なんの遠慮がいる」

「その言葉だけで結構ですよ。いまあなたとやったら、わたしは間違ひなくホモ扱いです」

「もう、意地悪」

唇を尖らせるレジーナの愛らしさに魅せられたギンブレッドは、押し倒したくなる衝動を必死に我慢しながら、や椰ゆ揄の言葉を吐く。

「あのですね。レジーナはエッチしていい、と簡単に言いますが、どういふことかわかっているんですか？」

「また、馬鹿にして。そのくらいわかっている。お前の股間にあるおちんちん、というも

のを、わたしの股間にあるオマ○コ、という穴に入れるのだろう」

「そうです。これを入れるんですよ」

レジーナの見守る中、ギンブレッドはズボンの中からいきり立つ逸物を引っ張り出してやった。

「む、で、デカイな」

畏怖したようにレジーナは目を点にする。

「おちんちん見たことあるんですか？」

「ああ、昔、ロシアと一緒に風呂に入ったときに……。あいつのは、もっと小さかったぞ」

レジーナの頭の中では、それで止まっていたらしい。

「そんな子供と一緒にされては困ります。これをいまレジーナの小さな身体に入れたら、絶対に裂けますよ。ただでさえ初めてのときは痛いんです。こんな戦場のドサクサでやるよりも、正式に結婚して、綺麗な花嫁姿で、清潔なシャツの上でロストパーズしたくありませんか？」

それは少女にとって魅惑的な夢だったらしい。レジーナは考えるような表情をしたが、ややあつてギンブレッドの顔を窺う。

「う、うん……でも、さっきのお姉さんたちが言っていたじゃないか。戦争の直後、男はみんな女が欲しくなるものだって。ギンブレッドが浮気しないか心配で……」

「はあ、信用がありませんね」

少女の懸念を前に、ギンブレッドは溜息をつく。

「それじゃ、こうしましょうか？」

不意にギンブレッドは、いきり立つ逸物を翳したまま、レジーナの細い足首を掴んで持ち上げた。

「キヤッ」

細い足を左右に開かされたレジーナは羞恥の悲鳴を上げる。

陰毛の生えてないツルツルの股間は、卵でも隠しているかのようにぷっくりと土手高だ。股を開くと肉溝が露出し、簡単に中身が少し見えてしまう。

ギンブレッドはさらに右手を下ろすと、ぷにっとした肉裂の左右に人差し指と中指をあてがいがい、大きく割った。

淡いピンク色の綺麗な姫貝が姿を現す。

それは鉛細工のように濡れ輝き、こぢんまりとした女性器だった。膣穴も小さいし、陰核も完全な包茎である。

「くっ!？」

空気に触れているだけで刺激になるのか、レジーナは辛そうに身悶える。

「レジーナは自分でここを触ったことはあるんですか？」

「ほ、ほとんどない。触ると、なんか痛いし……」

しっとり濡れ輝く陰唇は間違いなく処女。それも自決の経験すらないまっさらな陰唇である。

（あ、これがレジーナのオマ○コか……や、やりてえ、滅茶苦茶にしてやりてえ。いや、待て、待て。レジーナは主家からの大事な賜りものだぞ。こんなところで汚していいはずがない）

物欲しそうに見上げてくるレジーナが異様に可愛く、そのまま逸物をぶち込みたい欲求を必死に抑えたギンブレッドは、肉棒を陰唇の表面に置いた。

「あ……」

期待と不安の入り混じった吐息を漏らすレジーナの肉溝にそっと、いきり立つ逸物を添えた。

逸物の裏筋に、レジーナの温かい濡れた媚肉の感触が来る。

そして、両膝を閉じさせた。

「えっ?! あ、熱い……ギンブレッドのおちんちん熱い」

戸惑うレジーナに、ギンブレッドは嘯く。

「エッチなレジーナがやりたくて仕方のないセックスを疑似体験させてあげますよ」

ギンブレッドはまるで性に慣れた大人の女を犯すかのように、ザクザクと腰を前後に振るった。

「はあ、うんん、く、くすぐりたい。でも、そ、そこ……気持ちいい♪」

濡れた陰唇が肉棒を包み込むようだ。亀頭の裏側にコリコリとしたものを感じる。薄皮越しに、レジーナの淫核が勃起しているのだろう。

「あ、気持ちいいけど、恥ずかしい。あ、やだ。ダメ、おしっこ、おしっこ出そう」

「そのまま漏らしていいですよ」

羞恥に悶える少女に、優しくアドバイスしながら、ギンブレッドは素早く腰を動かし続ける。

「そんな、無理っ！ あ、そんなに擦られたら、ああ、ほんとに漏れそう、いや、ギンブレッドの前でなんて……」

初めての性体験に、レジーナは悩乱の声を上げて首を振るう。

(くぅ、やっぱレジーナ可愛いなあ)

幼少のころから無条件に慕い寄ってくれる可愛いお姫様。ギンブレッドにとって彼女は何にも代えがたい宝物である。

だからこそ、結婚や性交も手順を踏みたいと思う。しかし、ギンブレッドは成人男性であり、人並みの性欲もある。

温かい少女の雫を逸物に感じながら、ギンブレッドは叫んだ。

「レジーナ、イキますよ」

「えっ」

レジーナがキョトンとした顔をした次の瞬間、左右の太腿と無毛の恥丘に包まれた逸物

は大きく膨れ上がり、その先端から熱い牡汁が噴き出す。

どびゅ、どびゅ、どびゅ——ッ!!!

レジーナの薄い胸から鎖骨、そして、美少年と見紛う顔などが白く染まる。

「あ、熱〜い！ ああああ……」

自慰経験さえないお姫様は、年上の婚約者の精液を全身に浴びて、ビクビクと小柄な身体を痙攣させた。

あるいはこれがレジーナにとつての初めての性的絶頂だったのかもしれない。

人心地ついたギンブレッドは、萎しぼんだ逸物をしまうと、惚ほけているレジーナの身体をタオルで拭いてやる。

「これで満足でしょ」

「うん、でも、これセックスじゃないんでしょ？」

「ええ」

物欲しげに右手の親指を咥くわえたレジーナは拗すねたような顔をして見上げてくる。その甘えた表情にドギマギしながらも、ギンブレッドは頷うなづいた。

「セックスはしてくれないの？」

「それは帰ってからのお楽しみです」

覆いかぶさったギンブレッドは、レジーナの咥くわえていた親指をどかして、再び軽く接吻をした。



「あ、そこ……汚い……」

実に処女らしい反応だ。おしつこの匂いなどが気になっているのだろう。

「大丈夫だから、気にせず楽しめ」

羞恥から逃げ出そうとする女を押さえつけ、ギンブレッドは丁寧に舐め回す。

「はう、ダメ、そんなところ舐められたら、ああ、イヤ、気持ちいい、ああ、副将殿の舌、気持ちいい、はあ、はあ……」

当初は羞恥と緊張に身を固くしていたソレイユだが、陰部を舐め回されているうちに、その気持ちよさに蕩けてきたようだ。

頬が火照り、涙目になって、口元からは涎が溢れ出す。

それと察したギンブレッドは、一旦口を離して、右手の人差し指で、包皮に包まれた淫核を捉えた。

「あう」

中にコリコリとした肉芽の存在を感じる。

「あう、そこは、ダメ……」

「お前はオナニーのとき、ここを弄っているんだろ」

ギンブレッドの不躰な指摘に、男に初めて身体をまさぐられているソレイユは身を固くする。そして、震えながら口を開く。

「オナニーなんて……」

「しているだろ」

決めつけたギンブレッドは、クルクルクルクルと、包皮の上から肉芽を執拗に捏ね回してやった。

「はう、します。すいません」

オナニーしているなどということは、思春期の女の子としては、口が裂けても言いたくないであろう。しかし、急所の一点責めに耐えかねて認めてしまった。

すると、いわゆるマゾ的な喜びであろう、愛液の分泌がさらによくなくなった。まるで失禁しているかのような大量の液が溢れ出している。

「謝ることはない。それで普通だからな。だが、素直に応えたご褒美だ」
優しい口調とは裏腹に、ギンブレッドはいきなり包皮を剥いてやった。

「はひっ!?!」

小さいが真っ赤な宝石を剥きだしにされたソレイユは、目を剥き、涙を流しながら、口元から涎を噴いた。

オナニー経験はあるといっても、自分で剥いたこともない程度の幼いものだったのだらう。

それと察しながらも、嗜虐心^{しごやく}を大いに刺激されたギンブレッドは、剥きだしの淫核を舌先に乗せて、高速で舐め回してやった。

「そ、そこ……刺激が強すぎます。でも、気持ちいい……」

大口を開けたソレイユは、瞳を上げて白目を晒しながら悶絶している。気をよくしたギンブレッドはさらに両手を伸ばし、満々と張りつめた双乳を揉み込んでやった。

「ああ、何、これ凄い、頭が、頭の中が、真っ白、真っ白に痺れるうう……」

若く健康な身体は感度も素晴らしくいい。そんな敏感な身体の中でも一番敏感な場所を執拗に責められたのだ。

ソレイユはあっけなくいった。ビクンビクンと腰が痙攣している。

（あああ、アへ顔晒しちゃって……）

健康美少女もこうなつては、単なる牝である。

無垢な少女に性的快感を教え込むことに夢中になったギンブレッドは、ソレイユがいても、いっても許さずに執拗に責め立てた。

「あう、もう、もう、ダメ、はわわわわ……」

チヨロ、チヨロチヨロチヨロ……。

気の抜けた悲鳴を上げたソレイユの股間から、熱い液体が垂れ流れる。

それと察したところでギンブレッドは、ようやく顔を上げた。

腰を高く掲げている少女の股間から溢れ出した液体は、少女の顔にかかる。お陰で顔から胸元にかけてびしょびしょだ。

放尿がようやく止まったところで、ギンブレッドが嘲笑する。

「ここら、何漏らしているんだ。セックスの最中に粗相をする女を、伯爵様の寝所に入

れることはできないぞ」

「も、申し訳ありません……」

まさか自分でも失禁するなどと思っていなかったのだろう。羞恥のあまりソレイユの顔は真っ赤だ。涙目になってプルプル震えている。

なんとも男の嗜虐心を満たしてくれる仕草である。

もうギンブレッドは我慢できなくなつた。

「それじゃ、そろそろご希望通り、お前を大人にしてやろう」

「あ、ありがとうございます」

このまま狭い机の上に、ギンブレッドも乗るのは無理がある。そこでソレイユをうつ伏せにして、下半身だけ下ろさせた。

小さく引き締まった尻を、ギンブレッドは掴むと、いきり立つ逸物を、濡れそぼつ陰唇に添えた。

「力を抜けよ」

「はい！」

ソレイユはめいっばい気張つた返事をする。何せ初体験の直前だ。緊張するな、というほうが無理なのであろう。

苦笑を誘われたギンブレッドの視界では、菊花状の肛門がヒクヒク痙攣しているのを見て取れる。

(まあ、女なら通る道だからな)

覚悟を決めたギンブレットは、ソレイユが息を吐いたところに逸物を叩き込んだ。

ズボッ!

健康少女の処女膜は確かにぶち抜かれた。

「はう」

机に両肘をついたソレイユは顎を上げてのけ反る。

(くっ、さすがに初物はきついな)

若くて狭い膣洞に、逸物はみっちり詰まってしまい、いまにも裂けてしまいそうだ。

しかし、なかなか気持ちいい。一年間忘れていた女の抱き心地だ。獣欲を抑えられなかったギンブレットは、尻肉を掴んで逸物を強引に押し込む。

「ひiiiiiiiiiiiiiiii!!!」

哀れな子羊の刺殺される悲鳴とともに、ズブズブズブ……と肉棒は押し広げながら進んでいった。

コリッ。

やがて、亀頭部の先端が、コリコリとした処女の子宮口に届く。

「痛いかな?」

「だ、大丈夫です……。副将殿のおちんちん入れられて嬉しいですよ」

小麦色をした肌の内腿を、一筋の鮮血が滴っているの見える。

痛くないはずがない。しかし、その心意気が健気である。

「そうか。初めてが痛いのは仕方がない。我慢しろ」

少女が大人の女に羽化する登竜門だ。ソレイユの身を気遣いながらも、過剰な気遣いも意味はないと見極めたギンブレットは、少女のくびれた腰を掴みながら、腰を使い始めた。「はう、ああ、大きい。お腹いっぱい、副将殿のおちんちん、入れてもらえるなんて、ああ、夢みたい」

健気に慕ってくれる部下の腰を掴み、ギンブレットはリズムカルに腰を叩き込む。

ザラザラの贅肉が、きつく肉棒に絡みついてくる。

（くっ、なんだかんだで、フロマージュと別れて一年ぶりだからな。この犯し心地、たまらん）

隣の部屋では婚約者の少女が寝ているというのに、その背徳感もあつてギンブレットは否応なく高まってしまった。

二つの睾丸から噴き出した熱い昂りが、肉棒を満たす。

「いくぞ」

「はい。中で、中でお願いします」

赤毛を振り乱す部下の要望に、ギンブレットは答えた。

肉棒を押し込むと、切っ先にコリコリの子宮口の間を感しながら射精する。

「くっ」

断末魔の呻きとともに、肉棒は激しく脈打った。

ドビュッ！ ドビュッ！ ドビュッ！

「はああああ、入っている。入ってくる。熱い、熱いものが……」

初めての膣内射精の感覚に、若き牝は悩乱した。

それをがっちりと押さえつけ、心行くまで大人の薄汚い欲望を注ぎ込んでから、ギンブレッドは、小さくなった逸物を引き抜く。

「はう」

ぶるつと震えたソレイユは、異物の抜けた陰唇をきゅつと締めた。

しかし、直後に再び、開く。

どばつと白い液体とピンクの液体を垂れ流す。

さすがに罪の意識を感じたギンブレッドは、タオルで股間を拭いてやる。

「はう、ありがとうございます」

股間を綺麗にしてもらったソレイユは、机の上で仰向けになり、ギンブレッドの顔を見上げた。

「あの……副将殿」

「なんだ」

ことを終えたばかりのソレイユははにかみながら訴える。

「一回だけではわからないっていいですか。その……こんなんじや、若の褥に侍る自信が



ありません」

「だろ、お前には戦妻なんて無理だってことだ」

ギンブレットは慰めるように、ソレイユの頭を撫でてやる。

「そんなことありません。副将殿が、もつとあたしを徹底的に教育してください」

机から身を起こした若き魔女は、敬愛する直属の上司の胸に飛び込んだ。反射的にギンブレットは受けとめてしまう。

そこに地獄の底から響くような声が聞こえてきた。

「ほお、ほお」

硬直したギンブレットが視線を向けると、寝間着姿のレジーナが立っていた。その瞳は氷のように冷たい。

「……っ」

息を飲むギンブレットは、自分の血液が凍ったように思えた。レジーナは陰々とした声を出す。

「ギンブレットは我が姉の婚約者なんだがな」

それにソレイユは慌てながら応じる。

「ち、違いますよ。これは浮気じゃありません。副将殿はあたしに、若の夜伽についても恥ずかしくないように、エッチの礼儀作法を教えてくださいなんです」

「ほお、わたしの夜伽ねえ」

レジーナの眉間がヒクヒクと痙攣する。しかし、ソレイユはギンプレッドに抱きついたまま馬鹿みたいに陽気に応えた。

「そうですよ、あたしは副将殿からしつかり仕込まれて、若を楽しませることのできる女になりますから、楽しみにしておいてくださいね」

「そうか、……楽しみだ」

氷像と化しているギンプレッドに一瞥をくれたレジーナは、さつとカーテンを閉めて、寝室に消えた。

ギンブレッドは恩義を感じた。

「べ、別に、側室を持つことぐらい普通だ。わたしの旦那様は強くて、カッコよくて、頼りになる。わたし以外に好きな女が出るのも当然だ。ただし」

「ただし？」

「一番好きなのは、わたしだ。わたしは生まれたときから、ギンブレッドのお嫁さんになると決まっていたのだから。その意味ではフロマージュさんよりも、わたしのほうが断然、付き合いが長い」

背中に顔を押しつけたレジーナの宣言に、ギンブレッドは哄笑してしまった。

「そうだな。レジーナが一番古い」

しばし新婚夫婦の間に暖かい心の交流があった。

「いまのレジーナはもう、立派なレディだな。いや、まったくあのお転婆お姫様が変われば変わるものだ」

「もう、旦那様の意地悪」

そんな夫婦水入らずの語らいに刺々しい声が飛んできた。

「ちよっと、レジーナ。なに普通に洗っているのかな？」

「こういうときはね。全身を使って洗うものよ」

どうやら、ソレイユとフロマージュは、湯殿の外から中を窺っていたらしい。相変わらず裸にエプロンの二人は、自らの肉体美を誇るように胸を反らす。

バイーン！

と擬音が聞こえてきそうな胸元が、エプロンを押し上げる。

彼女たちに比べると、レジーナは悲しいほどスレンダーであった。

「ぐっ」

思わず威圧されてしまったレジーナを、巨乳コンビは押しつけて風呂に入る。

「うふふ、いま手本を見せてあげるわ」

「はーい、レジーナはお風呂にでも入っていてね」

有力貴族の筆頭騎士の屋敷とはいえ、そうそう広い風呂があるわけではない。そこに男一人、女三人が入ると、さすがに狭い。

洗い場を空けるために、レジーナは裸にエプロンのまま一人湯船に入った。

「お前らな、少しは……正室を敬って」

見かねたギンブレッドの抗議をみなまで言わず、フロマージュは自らの乳房を押しつけてきた。

「うわっ!!」

「あ、あたしも」

負けずにソレイユもまた自らの豊満な乳房を、ギンブレッドの脇に押しつけてきた。

ふわふわ、プリンプリンと微妙に感触が違う。

くっ、気持ちいい。気持ちいいが、レジーナの前で、あまりおっぱいで喜んでいよう

に見せるわけにはいかない)

湯船に浸かってこちらを見ているレジーナを気にして、ギンブレッドは必死に平静を装うが、襲いくる柔肉の感触はあまりにも強烈だった。

二人ともエプロンの布を胸の谷間に纏めているようで、コリコリの乳首の感覚が確かに伝わってくる。

どうしても、やにさがってしまいうギンブレッドの身体を、フロマージュとソレイユの乳房が左右から挟み、ふわふわと洗ってきた。

(うお、この感覚は……)

フロマージュとの付き合いは長いギンブレッドだが、国許にレジーナという婚約者がいたこともあって、基本的に女性遊びはしなかった。

よって悪友と違ってフロマージュ以外の女と付き合い合ったことはなかったし、当然、二輪車の経験もない。

初めてのダブルおっぱいの感覚に、少しずつ理性が溶けていく。

「もう、おっぱいだけだと思おうように泡立たないのよね。こういうときは♪」

石鹸を自らの陰毛で泡立てたフロマージュは、それをギンブレッドの身体に押しつけてきた。

シャリシャリ。

艶やかな筆に肌を撫でられる。

「うお、さすがです姐さん。真面目な顔してエロエロですね♪」
男を責める術に長けたフロマージュの姿に、ソレイユは尊敬の目を向けると、さっそく自らも做った。

二人は乳房だけではなく、陰毛、いや全身を、ギンブレッドに押しつけてくる。

「むう……」

一人風呂に浸かるレジーナは、湯船の中の自らの股間を見下ろす。

陰毛が一本も生えていない。

フロマージュやソレイユに比べて、いかにも自分が幼児体型であり、悔しいのだろう。

そんな様子を横目で見たフロマージュは、嫌味つたらしく声を上げる。

「こいつの悦ばせ方は、わたくしが一番よく知っているのよ」

大人げのない女である。

しかし、レジーナにはライバル意識を持つ一方で、ソレイユに対しては同志意識を持つたらしい。フロマージュは楽しげに声をかける。

「この愛液を塗りたくる作業って、結構来るでしょ。まるでマーキングしている気分になるのよね。これはわたくしの男って」

「ええ、凄い気持ちいいです。あたし凄く濡れちゃってます」

淫乱痴女二人はギンブレッドの腕を左右に開かせると、それぞれ手首を持った。そして、背中あわせになって二の腕に跨って、腰を前後させる。

「あは、気持ちいい〜♪」

そうやってオナニーを楽しんでいた女たちだが、不意にフロマージュがギンブレッドを見下ろして笑った。

「あらあら、そんなに大きくしちゃって」

指摘されるまでもなく、逸物は隆々と隆起していた。

「どお、今日は久しぶりにパイズリしてあげましょうか？」

舌舐めずりをしながら、フロマージュは妖艶に挑発する。

「ああ、頼む」

もはや見栄を張れる状態ではない。逸物はもはや刺激を求めて脈打っていた。

男を煽るだけ煽ることに成功した肉感的美女二人は、腕から降りるとその場にしゃがみ込む。

フロマージュとソレイユの鼻先に、いきり立つ逸物が来る。

「うふふ、さつき出したばかりだというのに、もうこんなに……、ほんとスケベな男だわ」
侮りの言葉とは裏腹に、恍惚とした表情を浮かべたフロマージュは、膝立ちになって自らの豊満な乳房の谷間に、ギンブレッドの逸物を挟んだ。

ズコ、ズコ、ズコ、ズコ。

乳房を左右から手で挟んだフロマージュはリズムカルに上体を上下させる。
そのさまにまたもソレイユが感嘆の声を上げる。

「おお、おっぱいって、そういう使い方もできたんですか？　なんであたしには教えてくれなかったんです」

「いや、それは……」

ギンブレッドはチャリと、湯船に浸かって惚けているレジーナの顔を見た。

「ああ……」

ソレイユも察したようだ。

ギンブレッドとソレイユの情事るとき、隣室からはレジーナが覗いていたのである。

レジーナの体型では、絶対にパイズリはできない。変にコンプレックスを持たせないための配慮である。

気を取り直したソレイユは強引にフロマージュに肩を並べた。

「あたしも参加させてください」

「ええ、いいわよ。せっかく大きいもの持っているんだし、こういうときに使わないとね」
フロマージュは逸物を乳房の谷間に挟んだまま、身体を左に寄せた。それを見てソレイユは右側から自らの乳房を持って、上体を近づける。

むっちり。

ギンブレッドの逸物は、フロマージュの柔らかかほかほか肉まんおっぱいと、ソレイユのむっちりぎっちり果実によってサンドイッチにされた。

（うお、これは……っ!!）

肉棒に襲いくる柔らかくも包み込む感触は素晴らしいが、それ以上に景色が素晴らしい。どちらも負けず劣らずの豊乳に、自分の逸物を包まれているのだ。

「うふふ、一騎当千の兵と言ったって、所詮はただの牡でしかないのよね。搾り取ってあげるわ。一滴残らずね」

挑発的な笑みを浮かべたフロマージュは嬉々として、上体を上下させた。

「副将殿はケーフェン家の宝ですからね。知っていますか、市井の人たちが小唄に謳っているって。ケーフェン伯爵家は、ギンブレッドで持つ、とか」

ソレイユは単にギンブレッドが喜ぶであろうと噂話を披露しただけだろうが、直後にギンブレッドは少し眉をひそめた。

その気持ちを、フロマージュが代弁した。

「あまり、いい傾向ではありませんわね」

「なんでですか？ 副将殿が、ケーフェン家の柱石と誰もが認めているんですよ」

驚くソレイユと顔を突き合わせて、パイズリを続けながらフロマージュは理由を説明する。

「名声のありすぎる家臣というのは、当主の権威を侵害するわ。いまはまだいいかもしれないけど、ロージア殿が成長したら、ギンブレッドとの間に確執が生まれるかもしれない」
「そんなことになったら、わたしがロージアの尻をペンペンしてやる」

湯船から立ち上がったレジーナの宣言に、フロマージュとギンブレッドは苦笑に近い微

笑を浮かべた。

そのレベルで済めばなら問題は無い。

確かに現在のギンブレットには、ケーフェン伯爵家に乗っ取ろうという野心はなかった。当主の義兄として、代理と言つていい権力を与えられているが、ロージアが成長したら、おいおい返すつもりである。

しかし、これが意外と難しいことは想像できた。

一人の家臣に甘えることを覚えてしまった当主が遊蕩に耽るようなことになってしまいかもしれない。そうなつたら、馬鹿殿に任すよりは、とギンブレットに責任感が芽生えるかもしれないし、家臣たちが勘違いして暴走するかもしれない。

「まあ、それは将来のことよ。いまずぐどうこうなる話ではないわ。いまは精いっぱい、痴夢に耽りましょう♪」

「そうですね。こんな楽しいことをやっているときに、政治の話なんて無粋です」

もともと政治的な話など興味はないソレイユは積極的に同意。

フロマージュとソレイユは、交互に上体を動かし、丸太のような逸物を扱き上げてくる。ジュツ、ブシユ、ジュツ。

乳白色の肌と飴色の肌の間で逸物は揉みしだかれて、泡立つ。

「こ、これって乳首が擦れて気持ちいい♪」

ソレイユが歓喜の声を上げる。

「わたくしも、気持ちいい♪ あはっ、こんなにおちんちん、びっくんびっくんさせちゃって、可愛い」

うっとりとしたフロマージュが見下ろす先で、逸物の先端の尿道口が広がる。

「くっ」

呻き声とともに、白い液体が噴き出した。

ドビュッ！ ドビュッ！ ドビュッ！

知的な眼鏡痴女と、健康的な痴女の顔に大量の白濁液はひとしく浴びせられて糸を引いた。

「あはっ、凄い。飛んだ♪」

赤毛はもちろん、鼻筋からも粘液を垂らしたソレイユは歓声を上げる。

「もう、二回目だというのに、こんなに出して♪」

フロマージュは呆れたといった表情を作りながらも、嬉しそうに舌舐めずりをする。

「ああ……」

レジーナは羨ましそうに、湯船の縁に両手をついて、首を伸ばす。

「あはっ、美味しい♪」

ソレイユとフロマージュは、正室の嫉妬の視線を楽しみながら、楽しげに互いの顔から胸にかかった男の液体を舐め取っていった。

※



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※ 二次元ドリーム文庫は、全編の方向性をきまめる

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!